

〈論文〉

再びアイヌ語千歳方言のAspectについて⁽¹⁾

—特に完了を表す形式をめぐって—

佐藤 知己

- 目次
1. はじめに
 2. 前稿における主要な論点
 3. 町田(1989)による完了Aspectの分析
 4. 鷲尾, 三原(1997)による完了Aspectの分析
 5. アイヌ語の完了Aspectを表す形式について
 6. おわりに

謝辞

キーワード： アイヌ語千歳方言、Aspect、完了、wa an、a

1. はじめに

筆者は既に佐藤(2006)において、千歳方言の資料に基づいてアイヌ語のAspectを表す形式 wa an および kor an について考察した。本稿では前稿において必ずしもわかりやすい形で述べる事ができなかった主要な論点を整理し、さらにそこでの議論において十分に意を尽くせなかったいくつかの点について再説する。とくに、wa an および a という形式の用法についてさらに一歩議論をすすめようと試みるものである。具体的には概略、以下のような点を論ずる。

前稿における問題点は、主に「パーフェクト」の定義に関するものである。前稿では、主として工藤(1995)の日本語Aspectに関する所論に基づいて、パーフェクトを「状態パーフェクト」と「動作パーフェクト」に大別してアイヌ語のパーフェクトを論じたが、これではいわば目が粗すぎて、アイヌ語の関連する形式が持つ様々な細かな相違が必ずしも明らかにならない、というきらいがあった。前稿の執筆以降、「完了」をこのような二分法だけでなく、今すこし細かく場合に分けて再度考察する必要があると考えるに至った。とはいえ、Aspect、特に研究の蓄積が多い日本語や英語のAspectに関する文献は膨大であり、もとよりそれらの主要なものにさえ通ずるこ

(1) 本稿は科学研究費(基盤研究(C))、「古文書によるアイヌ語史の構築」、研究代表者北海道大学大学院文学研究科佐藤知己、課題番号 17520245)による研究成果の一部である。

とは門外漢には困難であるが、以下では、とりあえず、「完了」を肯定形だけでなく、否定形の場合も勘案して部類分けする町田(1989)の日本語アスペクトに関する分析と、主として英語との対照を根拠に「完了」の機能を部類分けする分析を参照しつつ、アイヌ語のアスペクト、特に「完了(パーフェクト)」を表す形式について考察してみることにする。

2. 前稿における主要な論点

前稿においては、まず、wa an の用法について、工藤(1995)の議論に基づいて「完了(パーフェクト)」に「状態パーフェクト」、「動作パーフェクト」の二種の用法を認め、アイヌ語との対応を検討した。その結果、アイヌ語の wa an には動作パーフェクトの用法が認めがたく、動作パーフェクトを表す形式があるとすればそれは a であろう、ということ論じた。また、アイヌ語において専ら状態パーフェクトを表す wa an という形式が、ある種の事例(「待つ」など)においては日本語では動作継続と解釈される場合にも用いられることを報告した。また、なぜ wa an という形式が、iwanke「壮健である」、nukar「見る」、sikerayke「にらむ」、an「ある」のような、通常は結果継続とは解しにくい動詞と共に用いられるのかについても若干の私見を述べた⁽²⁾。

wa an の状態パーフェクト用法の例(佐藤 2006: 59)⁽³⁾ :

- (1) apa cakke wa an.

戸口 開く ている
「戸口が開いている」

a の動作パーフェクト用法の例(佐藤 2006: 64)

- (2) okaypo onuman ipe ki wa ek a ruwe?

若者 夕食 する て 来る た の
「あんちゃん、晩ご飯食べて来たの」

(2) この点については未だ考察が十分進んでいないことを認めざるを得ない。その後、気が付いた点としては、tere「待つ」、iwanke「壮健である」、nukar「見る」、sikerayke「にらむ」、an「ある」のような動詞は、いずれも過去のある時点から基準時までのある「期間」の行為の継続が問題とされやすい動詞なのではないか、という点がある。これは後に述べる完了の一種である「状態継続」と同種のものである可能性がある。しかしながら、意味的に同種のグループに分類されそうな yaynu「思う」は wa an を取ることがないなど、依然問題点が少なくない。また、アイヌ語において wa an が「回想、経験」のような意味を積極的に表示しているとは到底言えないという状況を考慮すると、これらの動詞についてだけ「回想、経験」と共通する「背景説明」のような解釈を認めることは体系的とは言えないという問題点もある。なお、この問題に関しては佐藤(2007)で別の可能性も示している。

(3) 以下では次のような略号を用いる。1 SG (一人称単数)、2 SG (二人称単数)、1 SG / 2 SG (一人称単数主格・二人称単数目的格)。

tane ku-ype a wa.

今 1SG-食べる た よ

「もう私は食べたよ」

日本語の動作継続に対応する wa an の例(佐藤 2006: 60) :

(3) eci-tere wa k-an kus ne na.

1SG/2SG-待つ て 1SG-いる つもり だ よ

「私はお前を待っているつもりだよ」

nukar 「見る」と用いられた wa an の例(佐藤 2006: 60) :

(4) ku-kar pe ku-siketok ta poronno an ma

1SG-する もの 1SG-目の前 に たくさん ある て

ku-nukar wa k-an pekor

1SG-見る て 1SG-いる かのよう

ku-yaynu kor oro wa ku-hopuni wa ku-kar.

1SG-思う つつ それ から 1SG-起きる て 1SG-やる

「私がやるのが目の前にたくさんあって、あたかも見ているかのように思って、それから起きて、私はやった」

an 「ある」と用いられた wa an の用例(佐藤 2006: 62) :

(5) toan cikuni kotcake ta seta an ma an

あの 木 前 に 犬 いる て いる

「あの木の前に犬がずっといる」

上記の点に関して、まず、wa an の特性を状態パーフェクトとみる指摘は基本的には誤りではないと思われるが、1. でも述べたように、パーフェクトを二分しただけでは実態を見えにくくする恐れがあり、さらに詳細な検討が必要と考える。以下ではこれらの問題を扱うが、アイヌ語の分析に入る前に、初めに主にパーフェクトの問題を中心として、Aspectに関わる一般的な分析を見ておくことにする。

3. 町田(1989)による完了アスペクトの分析

町田(1989)による日本語アスペクトの分析は多岐にわたっているが、関連する議論をまとめると概略以下のようなになる

町田は以下のような文を問題とする。

昼飯を食べた。「過去」

昼飯を食べた。「完了」

誰かがドアを開けている。「完了」

昼飯を食べなかった。「過去」

昼飯を食べていない。「完了」

町田(1989: 82-84)は、上の例において「食べた」(完了)の否定形「食べなかった」が、通常は完了とは解しがたい、という点に着目して、このような形式と意味の不一致は「た」にもともと完了の意味があるとする主張にとって不利な事実である、と指摘している。

また、同じく「完了」といっても二種の場合があり、それぞれに異なる形式が用いられることを指摘している(以下の引用参照)。

町田(1989: 85):

過去に成立した事象の結果が発話時点においても知覚可能である場合には、通常は「テイル」形を使用するのであり、事象が過去に成立していて、その影響が発話時点において残っていると発話者が判断しても、その結果が知覚可能な形で提示できない場合には、「タ」形を使用するのである。英語では、結果の知覚可能性ということは現在完了の使用を左右する要因とはならないから、いずれの場合にも現在完了形が使用される。

このような町田の指摘を勘案して、先にあげた例文に情報を追加すれば以下のようなになる。

昼飯を食べた。「過去」

昼飯を食べた。「完了」(結果が知覚不可能)

昼飯を食べていない。「完了」(結果が知覚不可能)

誰かがドアを開けている。「完了」(結果が知覚可能)

誰かがドアを開けていない。「完了」(結果が知覚可能)

昼飯を食べなかった。「過去」

町田は、さらに、なぜ「食べなかった」が完了に解されないのか、という疑問に対して次のように答えている（以下の引用を参照）。

町田(1989: 86) :

例えば、太郎が若いかどうかということを話題にしている状況では、(14)は適切であるが、太郎の身長のことを話題にしている場面では、「太郎が若い」という事象は全く無関係であるから、同じ文は不適切となる。

(14) 太郎はもう若くない。

従って、「ナカッタ」も、それに対応する肯定形である「タ」形が前提として主張されていたり期待されているという状況で発話されるものである。もし、「タ」形が過去においてある事象の全体が真であったことを主張する形式であるならば、「ナカッタ」形は、過去においてその事象全体が偽であったことを主張することになるが、その場合に前提として主張されているのは、「過去」においてある事象が真であったということであるはずである。ところが、「完了」は、過去において成立した事象の「現在における影響」であるから、完了を意味する文の否定形の場合は、前提として、そのような影響の存在が主張あるいは期待されていなければならない。つまり、「ナカッタ」形の文の前提は、完了を意味する文の否定形の前提としては不適當なのである。

この個所における町田の所説は必ずしもわかりやすいものではないが、簡潔に言えば、「ナカッタ」形は過去の事象の成立を否定し、過去の事象全体が偽であることを表す形式なので、過去において成立した事象の現在における影響を表す完了を意味する形式としては不適當になる、ということのようである。このことは「タ」が過去における事象の成立のみを表示する形式であるならば、残る形式は「テイル」しかないのである」（町田 1989: 86）と述べていることから推測される。

以上のような町田の所論に基づいて、あらためてAspectに関する主要な可能性と、対応する形式をまとめると以下のようになる。

昼飯を食べた。「完了」（結果が知覚不可能）

昼飯を食べていない。「完了」（結果が知覚不可能）

誰かがドアを開けている。「完了」（結果が知覚可能）

誰かがドアを開けていない。「完了」（結果が知覚可能）

町田によるこのような否定の事例を念頭においた完了の細分化を考慮に入れたアイヌ語の分析に

については後の節で具体的に触れる。

4. 鷺尾, 三原(1997)による完了アスペクトの分析

アスペクトの議論の中で完了を取り上げ、その細分化を図った研究として、さらに鷺尾, 三原(1997)の研究を挙げることができる。この分析は、町田(1987)が動詞の否定形に着目して完了の問題を掘り下げているのとはまた別のアプローチで完了の問題を一步進めている。特に、英語との対照に基づいて、「テイル構文」の意味に関して注目すべき分析を行っている。

鷺尾, 三原(1997: 112-115)によれば、機能によって「テイル構文」には以下のような種別が認められるという。

動作持続⁽⁴⁾

太郎が本を読んでいる。

花子が泣いている。

木の枝が揺れている。

結果持続

革命軍兵士が死んでいる。

あれ、電灯が消えている。

田中君が今、研究室に来ている。

状態持続

太郎が結婚問題で悩んでいる。

花子が大家を恨んでいる。

僕は以前からそう思っている。

太郎は就職のことを考えている。

私は生まれてからずっと大阪に住んでいる。

もう長い間ステーキを食べていない。

効力持続

シェイクスピアは多くの歴史劇を書いている。

祖父は7年前に死んでいます。

(4) 鷺尾, 三原(1997)においては、同じく完了であっても、haveを用いた英語の完了の用法に関しては「所有」という用語を用い、日本語の「ている」を用いた事例に対しては「持続」という用語を用いて区別している。

また、英語の完了相の分類については次のような例文をあげ、四つに分類するという提案を行っている。

鷲尾, 三原(1997: 133–134) :

- (47) a. John has pressed the button. 〈過程所有〉
- b. The taxi has arrived. 〈結果所有〉
- c. I have lived in London since 1980. 〈状態所有〉
- d. I have read the book before. 〈効力所有〉

上の分類に関して、「過程」、「効力」については次のように述べている。

鷲尾, 三原 (1997: 131–132) :

- (45) a. I have already done the homework.
 僕はもう宿題をやった。
- b. John has scolded his son.
 ジョンは息子を叱った。

その動作が発話時と関わる過程（発話時関連性）は、事態の効力が過程(process)的に存続することを意味するものである。たとえば(45a)であれば、宿題を済ませたという事態が、遊びに行ける/お母さんに叱られずにすむ/明日の授業も安心だ、といった様々な状況と結び付いてゆく。そしてこれらの状況が、1つだけではなく、いくつか複合して現れることも十分あり得る。この類型を「過程所有」と称することにしよう。

経験に関してはどうであろうか。経験の現在完了相は他の類型とは対極にあり、記述の焦点を過去にシフトしているが、定過去副詞と共に起しにくいという点において、発話時との関連を完全に断ち切っている訳ではない。つまり過去の事態が、ある種の効力を伴って発話時と関連している、ということである。(46a)、(46b)は、これらの文で記述されている事態が何らかの意味で発話時現在と関連している、という文脈において最も適合することに注意されたい。この類型を「効力所有」と呼ぼう。

- (46) a. He has once visited Boston.
 彼はかつてボストンを訪れている/訪れたことがある。
- b. All my family have had measles.
 私の家族はみんなはしかにかかっている/かかったことがあります。

また、鷺尾、三原(1997)は、「過程」に関して、英語と日本語では「近過去」、「遠過去」の表現において差異があることを指摘して次のように述べている。

鷺尾、三原(1997: 185) :

さて最後は過程所有と「タ」の対応である。英語の完了相が状態所有も含め、過去の事態を示すことは繰り返し述べてきたが、このうち最も過去に傾斜した類型が効力所有であった。効力所有は、遠過去(remote past)の事態を記述するものであって、近過去(near past)の事態の記述には適していない。このことは対応する日本語の効力持続にも当てはまり、「*太郎はほんの数分前に空港行きのバスに乗っている」などとは言えない。他方、過程所有は近過去の事態を記述するのであるが、発話時現在との関わりがより密接であるという点において、遠過去を冷酷に切り捨てていると言える。今日の午前中の出来事であっても、午後になると、過程所有の完了相と this morning を共に用いることはできない。

英語の過程所有で表される、近過去において完了した事態は、日本語ではどのように記述されるだろうか。重要なことは、このような事態を表現するための「テイル」の類型が、日本語にはないということである。(結果持続は反例にはならない。「あの時計は壊れている」と言う時、時計が壊れたのはほんの1時間前であったかもしれないが、10年前であったかも知れない。そしてそもそも、結果持続では動詞のタイプが異なる。)つまり日本語は、過程所有が表す「近過去」を、過去時制の「タ」で表現するのである。「タ」は過去を示すので、「10年前に読んだ」という遠過去と同様に、「さっき読んだ」という近過去も表現し得るからである。日本語にはこうする以外に英語の過程所有を表すことができないと言えよう。

以上のような完了(パーフェクト)に関する鷺尾、三原(1997)の所説の主要な点を簡潔に述べれば、次のようになるであろう。

1) 英語の現在完了形には「過程所有」、「結果所有」、「状態所有」、「効力所有」の四種の機能が認められる。

2) これらのうち、「結果所有」、「状態所有」、「効力所有」には、日本語の「テイル」形で表される「結果持続」、「状態持続」、「効力持続」が対応する。

3) 英語の「過程所有」には「テイル」形が対応せず、「タ」形が対応する。

以下の節では町田(1989)、鷺尾、三原(1997)で得られている完了に関わる分析結果を基にアイヌ

語の完了現象を見ることにする。

5. アイヌ語の完了Aspectを表す形式について

既に紹介した町田の日本語の完了Aspectに関する分析とアイヌ語の完了Aspectとを対比させると概略以下のようなになる。

日本語の場合：

(結果が知覚不可能な完了)

肯定 「タ」

肯定 *「テイル」

否定 *「ナカッタ」

否定 「テイナイ」

(結果が知覚可能な完了)

肯定 *「タ」

肯定 「テイル」

否定 *「ナカッタ」

否定 「テイナイ」

アイヌ語の場合：

(結果が知覚不可能な完了)

肯定 a

肯定 *wa an

否定 ???ka somo ki a wa

否定 ka somo ki no an

(結果が知覚可能な完了)

肯定 *a

肯定 wa an

否定 ???ka somo ki a wa

否定 ka somo ki no an

結果が知覚不可能な完了、かつ肯定の例文：

- (6) ku-ype a wa.
1SG-食べる た よ
「私は食べたよ。」

結果が知覚不可能な完了、かつ否定の例文：

- (7) na ku-ype ka somo ki no k-an.
まだ 1SG-食べる も ⁽⁵⁾しない で 1SG-いる
「私はまだ食べていない。」

結果が知覚可能な完了、かつ肯定の例文：

- (8) kuttokono hokus wa an.
あおむけに ひっくり返る て いる
「あおむけにひっくり返っている。」

結果が知覚可能な完了、かつ否定の例文⁽⁶⁾：

- (9) hokus ka somo ki no an pe
ひっくり返る も しない で いる もの
「ひっくり返っていないもの」

上の結果から明かなように、町田の肯定形、否定形に関する分析を参考にしてアイヌ語の事例を見ると日本語とアイヌ語は極めてよく似た状況にあることがわかる。すなわち、知覚可能か否かで肯定形が変わるのに対し、否定形は知覚可能、不可能にかかわらず同じ形式が用いられている⁽⁷⁾。しかしながら、細かい点では差異もみられるということに注意しなければならない。最も目立つ差異は、日本語の否定形が「テイナイ」のように「イル」を否定した形式を取るのに対し、アイヌ語の否定形は ka somo ki no an のように、「ナイデイル」のように否定が「イル」の前に来る、という点である。なぜ日本語とアイヌ語で、完了の否定形の否定要素の位置が逆であるのか、今後、

(5) 日本語の「も」のような強調的な意味はここでは必ずしもないが、仮に「も」と訳してある。

(6) 適切な例が多いとは必ずしも言えず、今後も用例の収集を継続する必要があると思われる。

(7) ちなみに、アイヌ語では、動作継続の否定形式も somoki no an である。例： tane anak nep ka ku-kar ka somo ki no k-an。「今は何も私は作っていない。」

他の現象との関連も含めてさらに研究が必要であろう⁽⁸⁾。また、もう一つ注目すべき点は、アイヌ語では知覚可能な完了であるか、知覚不可能な完了であるかにかかわらず、また、過去の解釈であるか完了の解釈であるかにかかわらず、*somo ki a wa「なかったよ」という形式が通常は用いられない、と言ってよいような状態であることである⁽⁹⁾。今後もなお用例の収集とさらなる検討が必要であるが、主文の文末において否定の形式の後に a を用いた例が極めて少ない、ということは、「なかった」という形式に関する町田(1989)の考察を援用すれば、a が過去よりも完了に傾斜した意味を持つ形式であるために前に否定形式を取りにくい、ということである可能性があると言えよう。

次に、鷲尾、三原(1997)の英語、日本語にかかわる完了Aspectの分析結果とアイヌ語の完了Aspectとを対比させると概略以下のようなになる。

	英語	日本語	アイヌ語
「過程」	現在完了形	「タ」	a
「結果」	現在完了形	「テイル」	wa an
「状態」	現在完了形	「テイル」	wa an
「効力」	現在完了形	「テイル」	

上の表によると、やはり日本語とアイヌ語はよく似た体系を示すが、大きな違いとしては、「効力」に該当する形式がアイヌ語では不明瞭である、という点があげられる⁽¹⁰⁾。アイヌ語の a は、「過程」を表す場合に使用可能であることは疑いないが、「効力」の場合は事情が異なる。henpak suy ka sapporo ta k-arpa a wa.「何度か札幌に私は行ったよ。」という文は「行ったことがある」という効力を表すとも考えられるが、他方、過去とも過程継続ともみなすことができ、効力を意味するかどうかはむしろ文脈に依存する、と言ったほうがより適切であろう。

また、他に注目すべき点として、「遠過去」、「近過去」の取り扱いがあげられる。英語の現在完了形の用法で問題となるのは、現在完了形が recently, this week のような「近過去」を意味する副詞としか共起できないことであるが(鷲尾、三原 1997: 124)、結論的に言えば、アイヌ語の過

(8) 一つ考えられるのは一種のプロッキング現象である。すなわち、もし、日本語と並行的に、「ていない」という構造を取ったとすると、「いない」はアイヌ語では isam という特別な否定動詞で表されるので、「ていない」に対応するアイヌ語の形式は wa isam となると思われる。しかし、アイヌ語では、wa isam は対象の破損、消滅を意味する表現として既に確立しているために、同時に完了の否定形として用いることはできない、ということではないかと思われる。

(9) 従属節における a の用法はいわゆる「相対時制」の問題があるのでここでは考察から除外し、もっぱら主節の末尾における a の用法のみを問題とする。主節の末尾位置の例としては、これまでのところ、ku-kore ka somo ki a wa.「私はあげなかったよ」、e-ahupkar ka somo ki a wa.「私達はもらいに行かなかったよ」、kani ka kumokor ka niwkes no k-ekap pa ku-mokor ka somo ki a wa.「私も眠ることができずに、会えてうれしくて、私は眠らなかったよ」の三例しか見いだされていない。もっとも、例が皆無、というわけではないので、このような用例が自然である条件をさらに追求する必要があると思われる。

(10) henpara ka, teeta k-e amkir pekor ku-yaynu.「いつか昔私は食べたことがあるように思う。」のように、amkir という助動詞を用いて効力を表すことは可能だが、語彙的な手段であり、効力を表す組織的な手段とは認めがたいのでここでの議論からはひとまず除いて考えることにする。

程完了を表す a には、近過去、遠過去の区別はない、と言って良いようである。この点は以下の訳語からも明らかのように、日本語の「タ」についても当てはまる。

- (10) esir ka upas as kor an siri
さっきも雪 降る つつ ある 有様
terebe ani ku-nukar a wa. (近過去)
テレビ で 1SG-見る た よ
「さっきも雪が降っているのをテレビで私は見たよ。」

- (12) toop teeta wano sikot ta aynu okay pe ne a wa.
ずっと 昔 から 千歳 にアイヌ いる もの である た よ (遠過去)
「ずっと昔から支笏にアイヌがいたものであったよ。」

また、前稿でも述べたが、アイヌ語の a は「過去」も「完了」も意味することができるという点で日本語の「た」と類似しているが、アイヌ語の a の場合には、話者の発話時点での態度（ムード）を示す形式（wa「～よ」など）との共起がほぼ義務的であることから（佐藤 2006: 64）、たとえば町田(1989)が日本語の「タ」の取り扱いにおいて「タ」を過去の形式としている分析をそのままアイヌ語の a に適用することはできないと思われる。すなわち、アイヌ語の a は日本語の「た」が基本的には「過去」と規定するのがふさわしい特徴を持っているのに比すれば、より「完了」に傾斜した形式である、ということができるかもしれない。

6. おわりに

本稿では、前稿に引き続き、アイヌ語のアスペクト、特に完了を表す形式について考察し、「肯定」、「否定」、「過程」、「効力」という新たな側面を加えてアイヌ語の完了について考察を加えた。その結果、wa an は「動作パーフェクト」を表せない、とする前稿の指摘を一步進めて、wa an は「過程」、「効力」を表せない、とするほうがより明確な特徴付けに一步近付く可能性を指摘した。これに対し、a は前稿で「動作パーフェクト」に含めて考えた事例のうち、「過程」に当たる意味を表すことは可能であるが、「効力」に当たる意味を表すものとは考えにくいことを示した。結論的に言えば、アイヌ語においては「完了」を意味する wa an、a のいずれも基本的には「効力」の意味では用いられない、ということになる。これらの議論を通して、意味、機能のみならず対応する否定の形式との関連においてもアイヌ語の助動詞 a は日本語の「タ」と顕著な平行性を示すことが明かとなった。もっとも、a がムードの形式を要求する点は「タ」と異なる点であり、また、日本語の「タ」と異なり、動詞の活用形を形成するものでなく、従って義務的でないなど、完全に

同一視できない点もあることが注意される。なお、前稿でも課題とされた動詞のいわゆる「裸」の形とアスペクトとの関連や、状態動詞などの例外的事例についての考察は本稿でも十分つくすことができなかつた。引き続き今後の課題としたい。

謝辞

本稿で用いたアイヌ語の用例はすべて白沢ナベ氏にご教示いただいたものである。ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

工藤真由美 (1995), 『アスペクト・テンス体系とテキスト』(ひつじ書房)

町田健 (1989), 『日本語の時制とアスペクト』(アルク)

中川裕 (1981), 「アスペクト的観点から見たアイヌ語の動詞」『言語学演習' 81』(東京大学文学部言語学研究室), 131-141

佐藤知己 (2006), 「アイヌ語千歳方言のアスペクト—kor an、wa an を中心に」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』12 (北海道立アイヌ民族文化研究センター), 43-67

_____ (2007), 「アイヌ語のアスペクトと日本語のアスペクトの対照」『日本語学』26(3)(明治書院), 44-52

鷲尾龍一, 三原健一 (1997), 『ヴォイスとアスペクト』(研究社)

Aspect in Ainu Re-examined

Tomomi SATO

Summary :

In my previous paper I noted that the Ainu perfect form *wa an* indicates “stative perfect”, but not “actional perfect”, unlike the corresponding Japanese perfect form *te iru*. I also noted that the meaning of actional perfect is in fact indicated by a different means: the auxiliary verb *a*. In this paper I further suggest that there is still some room for improving the characterization of *a*: the notion of actional perfect can be further divided into ‘process’ and ‘indirect effect’, but the auxiliary *a* is mainly used for expressing process but not indirect effect. Furthermore, although the function of the auxiliary *a* has been in question for long, I claim that the feature of perfect of this form is clearly found in the fact that negative forms of verbs usually do not appear with it: since perfect usually presupposes the realization of a past event, the use of the negative form of a verb involving the non-occurrence of past event would be inconsistent with the perfect auxiliary *a*, which assumes the occurrence of a past event and its relevance to the present situation.

Key Words :

Ainu, Aspect, Perfect, *wa an*, *a*